
熱いバニラ

朝衣海美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱いバナナ

【コード】

N5356I

【作者名】

朝衣海美

【あらすじ】

少年から青年へ変わっていく微妙な心理状態の中、同性に恋心を持った男の子のお話。

Act・1 きっかけ

初めて人を好きになったのは、幼稚園の年長さんの時。恋なんて言えたもんじゃないけど。

相手はみんなみたいに、幼稚園の先生…ならよかったんだけど…俺が好きになったのは、隣のクラスの男の子だった。

大好きでいつもいつも金魚のフンみたいにくっついてたっけ。でもある日、男の子が同じクラスの女の子を好きになって振られちゃって、幼いながらに泣いたなあ。

今となつては名前も顔も、なんで好きだったのかも思い出せない。

小学生の時は3年の時は同じクラスの女の子が好きで、5年の時はバスケ部の先輩、もちろん男だけど、好きになった。

中1の時は女子バスケの先輩と付き合って、童貞じゃなくなった。

恋愛経験は、多分その女の先輩だけじゃないかな。他は何となく誰が好きって聞かれたらそう答えるかな、っていう程度に好きだけだったから。

そう考えてみたら、俺って意外と男でも女でもイケるんだ、と思えた。

それなら、ここ数日のこの胸の鼓動も、納得できる。

それは…高1になってすぐの席がえて、俺の斜め右前になったやつ。

こいつが気になって仕方がなかった。

入学式が終わって最初の1週間は、顔と名前を覚えるためか、名前順だった。おかげで、大体の顔と名前が一致してきた。

女子と男子が半分ずつ、38人のうちのクラス。特に男女で分けるでもなく、バラバラにクジ引きで決められた。

ひいたクジの席は窓際が一番後ろ。なんてラッキー！とか思ってたなら、前も隣も女子…。それはラッキーじゃない。男がいなきゃ、気軽な話し相手がないじゃないか。

そんなふうにして窓の外を見ていたら、無愛想な声で「おい」と呼ばれた。

「紙、落ちてんぞ」

床を指さしたそいつは、斜め右前の席に座った。床に落ちていたプリントを拾って机の上に置く。

「確か、こいつの名前は…」。

「皆川光司くん、だよな！よろしくね」

俺の前の女が隣になったそいつに声をかけた。

そうそう、皆川だよ、うん。随分無愛想なやつだとは思ってたけど、まあ悪い印象を受けるほどじゃないし、そのうち話しかけてみよう。

一人でそう納得しながら、ホームルームが終るのを待った。

Act・2 淡い恋心

「そうだよ、あのあとすぐ、クラス対抗の球技大会があつて、それから仲良くなつたんだよなあ……」

机に肘をついて、掌に顎をのせて、ぼんやりと斜め右前の席を見つめていたら、思わず声が出てしまった。

慌てて教室内を見回したけど、今は体育。サボリの俺以外は誰もいない。

「もう12月か……」

「大地拓海！」

呟いて窓の外を見た瞬間、突然名前を呼ばれてガバツと振り返ると、ドアにもたれかかって呆れ顔した光司がいた。

「お前、またサボリかよ。体育だけ単位足りなくなるぜ？」

安堵の息を吐いて机に突っ伏した俺に、近付いてくる足音。俺の机の側で止まるのを聞いて顔をあげると、光司は腕を組んで見下ろしている。

「光司だつてサボリじゃん」

「俺は忘れ物取りにきただけ」

言いながら、体育で使う100m走のタイムを書き込む名簿を取ってドアまで歩く。

「さつき生活指導の三沢が回つてたぜ、そこじゃバレる。他行け

よ

光司の言葉に、かつたるく手を振ると、光司が走り去る足音を聞いてから立ち上がったって伸びをする。

さつきまで思い出していたことを頭の中でもう一度繰り返しながら、寒い屋上に向かう。少し頭を冷やさないと、光司をまともに見られない。

俺の頭は、心は、風邪でもひいたように熱がある。
おかしい。

「光司相手にこんな気持ちになるなんてな」

ガリガリと後頭部を掻いて、重いドアを押すと、寒いけどよく晴れた、風のない屋上の空気に包まれて、気持ちいい。
迷うことなく、ドアからは死角になる壁の後ろに座り込んで、ぼーっと空を見つめる。

青くて遠い空。

校庭からは体育をやってるクラスのやつらの声が聞こえる。

俺の頭は、心は…数日前から風邪っぴき。

微熱と、動悸が…。

本当におかしいんだ。

結局体育が終わっても教室に戻る気になれなくて、最後のチャイムが鳴り終わるのを、遠くに聞きながら、やっと立ち上がると、体中が冷えていた。

これなら、光司に会っても大丈夫か？

パンパンと制服をはたいて、屋上のドアを開けようとした瞬間、屋上に向かってくる足音が聞こえた。多分、3人。

急いで、さっきの死角になっているところに引き返す。

「先生だったらヤバ・・・」

俺が死角に行った所で、重いドアが音を立てて開いた。話し声が聞こえて、女の子が2人・・・それから、光司！

「ね、皆川くん、今日こそ返事聞かせてあげてよね！この子、夏休み前に告白したのに、まだ返事くれないって昨日私に泣きついてきたんだから」

「そうだったっけ？」

突然のことに、俺はびっくりした。思い切って、気づかれないようにそつとのぞいてみるが、女達は俺に背を向けて立っていて誰だかわからない。

光司は、困ったような複雑な、でも少しだけ嬉しそうな顔をしている、ような気がする。

「まあ、いいんじゃないの？とりあえずお試しってことでさ、付き合ってみる？」

俺の頭が真っ白になった。

気の強そうな女が、うつむいてた女にやったじゃん！と声を掛けて、喜ぶ。うつむいてた女も顔を上げて嬉しそうにしている・・・んだと思う。

光司は光司で、鼻の頭なんか掻いちゃって、照れくさそうに笑ってる。

正直、この時まで、自覚してなかった。

光司に彼女が出来ることがこんなにショックだと、思ってたなかった。

もっと軽い気持ちだった。

だけど、自覚してしまったら、もうだめだ。

誰もいなくなった屋上で、俺はただ1人たたずんだ。

「明日からも、ちゃんと笑えるのか、俺……」

倒れてしまいそうだ。

Act・3 自覚症状

あんな告白の後でも、彼女と一緒に帰らないんだな、と思ったのは、もう1週間も前のこと。

彼女ができたことを、光司の口から聞いたのはほんの数時間前の昼休み。

今は放課後。誰もいない教室。

「お前、彼女と一緒に帰らなくていいのかよ？」

窓の外を見てうつぶせたまま、光司を見ないで聞く。

「あの子にも部活あるし、俺はこれからバイトだし、一緒に帰れるわけねーだろ？」

「じゃあさっさとバイトいけよ」

頭を上げて、光司を見ると、なんだか複雑な顔をしている。

「実はさ、俺、やっぱり別れようと思っててさ」

「え！？なんで！？まだ1週間じゃん」

言ってから、しまったと思った。光司が怪訝そうな顔で俺を見る。

「何で一週間って、知ってるんだよ」

光司から顔を逸らして、小さくため息を吐く。

「あの時、屋上にいたんだよ、俺。あのまま、体育サボって、次の授業も出なかつただろ？」

「そうか……。聞いてたんならわかるだろ？お試しだったんだから……。いつ終わらせたって……」

「可哀想じゃないのか？その気もないのに、付き合ったりするから悪いんだろ？」

「じゃあ、このまま、その気もないまま付き合い続けろって言うのか？」

珍しく光司が声を荒げる。それに驚いて、思わず体ごと起きて光司を見る。

はつとしたように光司が口ごもる。

「悪い。なんかさ、違ったんだよ。付き合いってみたら好きになるかもって思ったんだけどさ、週末に2人で会ってみて思ったんだ。なんか、違うんだよ。俺が求めているのはこんなんじゃないかねえあとか思ってた。だから、可哀想だけど、別れようと思ってるんだ」

ああ、俺ってなんて性格が悪いんだ、彼女と別れるという光司の言葉に、確実に喜んでる。

「まあ、しょうがないんじゃないの？確かにそんな気持ちのまま付き合いしてるのも失礼だし」

なんて、いい友達ぶってみるけど、内心は跳ね上がる鼓動を抑えるのに必死。ついつい緩んでしまいそんな頬を押さえるのに必死。

「お前、嬉しそうな顔してんじゃないよ」

ひくついてしまった頬を見逃してはくれなかったらしい光司に頬をつねられ、ひっぱられる。

「いひゃ、らっへ、おえほいつひよに・・・」

「何言ってるかわかんねー、ほれ、離してやるからもっかい言うてみる」

ヒリヒリする頬を押さえながら、へらつと笑った俺は言う。

「俺と同じ彼女ができない男に戻るって事だろ？」

言い終わると今度は両頬をつねられた。

「できないんじえねえよ、作らないんだ！」

知ってる？光司、こんなことされても、俺は嬉しいって思ってるし

まうんだ。

「いひゃい・・・」

「しるか」

その日の夜、光司は電話で彼女と別れたらしい。
彼女のほうは泣いていたと、光司は言っていた。

「まずいな、俺・・・。押さえられなくなる前に、この気持ちな
んとかしなきゃ・・・」

そんな自覚症状を、とりあえずはどつすることもできないまま、
また日常に戻っていく。

いつまでだましていけるのか、俺は気が気じゃないんだけど・・・。

Act・4 心を閉じる

光司が彼女と別れてからもう1ヶ月。
俺は正直なところ、焦っていた。

恋なんかじゃない、抑えないと友情さえ失う！そう思って、抑え込んで抑え込んで、限界がやってきた。

「結城、俺と付き合い合わねー？」

俺の突然の発言に、隣にいた結城美香が、ガバッと俺の方を見た。というか、俺の席の近くにいたほとんどのやつが、こっちを見た。

「はあ！？なんで？」

「いやー、結城のこと好きだなー、俺…とか思って」

突然光司ががたつと席を立った。俺も顔を上げると、光司は何か言いたそうな複雑な顔をしている。なんだ？と思う暇もなく、光司が教室を出て行ってしまう。

それとすれ違つるように次の授業のチャイムが鳴って、地理の先生が入ってきたから、みんなは今のことも忘れたかのように自分の席に戻る。

光司は戻ってこない。俺は、窓の外を見ていた。

放課後、ぼーっと席に座ったままの俺に、結城が話しかけてきた。

「ねえ、大地、何であんなこと言ったの？私のことなんて、好きでもなんでもなくせに」

「女の子って、すごいねえ？なんでそんなことわかるの？」

結城は目の前に座ると、腕を組んで溜息を吐いた。

「女の子じゃなくなつて、あの場にいた全員がわかつてたことよ。あなたの態度見てれば、誰が私を好きだと思つたのよ？」

「ん〜でもさ、結城と付き合いたいと思つたのは本当なんだけどなあ…」

俺の発言に、結城は2、3回瞬きしたあと、じゃあ、と言葉を続けた。

「ためしに付き合ってみる？私、今フリーで暇してたところだし」

「じゃ、そういうことで、よろしく」

「うん、よろしく。それじゃ、また明日ね」

たった今、付き合うことになつたはずの俺たちは、特に変わったことはなく、いつもと同じように、また明日、と挨拶をした。俺はまだボーっと自分の席から立ち上がらない。しばらくぼんやりしていると、光司が入ってきた。

「今の、本気かよ。結城と付き合つて」

「本気だよ、なんか悪いか？」

いつもどおりのへらへらした笑いにのせていった言葉は、なんとなく乾いていた。

「結城に失礼じゃないのか？好きでもないのに…」

「お前だつて付き合つただろ？それに、俺は結城のこと好きだからいいんだよ」

俺の言葉に、ピクリと光司の眉が動いた。

「そうか、それならいいんだ」

「おう、いいだろ。んじゃ、俺、帰るわ」

「あ、ああ、またな」

光司はうつむいたまま、こっちを見なかった。

誰のために、こんな嘘までついてるんだ…そう思ったけど、それは口に出しちゃいけない。

なんだかうまくいかない。

乾いてる。

飢えている。

何に…？

そんなの決まってる！！

だめだ、心を閉じろ、俺！

欲しがっちゃいけないものもあるんだって、高校生になって初めて気がついて、唇をかみ締めた。

Act・5 告白

「ねえ、あんたたち本当に付き合ってるの？」

突然掛けられた声に、机にうつ伏せていた顔を上げたら結城の友達の中村がいた。せつかくもう少しで眠れそうだったのに、と不機嫌な顔を見せた俺に中村はびしっと人差し指突き立てて言った。

「あんたねえ、自分から美香に付き合おうって言うときながら帰りも別々だし、デートもしてないらしいじゃん。それどころか携帯番号も交換してないとか、…それって付き合ってるっていうの？」

何故かわからないが、中村は怒っているようだ。いや、何故かわからないなんてことはないんだけど。確かに中村の言うように、付き合うことになってから1ヶ月、俺たちは一緒に遊んだりもしていないし、特に今までと変わったようなことはなにもしてない。結城は何も言ってこないから別にそれでもいいんだと思ってたけど、違ったのだろうか？中村の後ろにいる結城はなんとなく申し訳なさそうな表情で立っている。

「あー…、わりかつたな」

「ちよつと、それだけ？美香、こんなやつだよ、別れちゃえばいいのに」

中村が結城を振り返って声を荒げる。なんともヒステリックな声にあからさまに嫌な顔を見ると睨まれた。女つて、怖い…。

「大地、ごめんね、なんかこんなじゃ悪いし、やめようね。元々何もなかったんだし別れるも何も無いけど、さ。一応、ね？」

「ん？…ああ、わかった。悪いな…」

目を合わせずに言いながら席を立つ。教室中の奴らがこつちを見ていたのがどうにも居辛い。教室を出て屋上へ向おうと廊下を歩き出した所でクラスの連中が騒ぎ出す。俺のしつたこつちやないが、人のことを面白おかしく噂にするのはやめてもらいたいなあ、なんて考えながらゆっくり歩いていった。

「おい、授業さぼるのか？」

心臓が飛び出るかと思った。後ろから掛けられた声は、光司のものであった。階段を上る手前で掛けられた声に、振り返って苦笑を漏らす。

「ああ、居辛いじゃん？なんか俺、悪者だし」

「そうだな。適当に付き合うから、そうなる」

複雑な気分だ。冷静な、むしろ冷たいとも取れる表情で光司は淡々と言った。目を合わせようとしてもしない。嫌になる。何のために、誰のためにこうなったんだと胸の中で黒いものが蠢いている。俺じゃないみたいだ。

「誰のために、こんなことになったと思ってんだよ…」

小さく呟いた、聞こえないように、聞こえないはずのその声は誰もいない廊下で思ったよりも響いてしまった。

…しまった

そう思った時には遅かった。光司が怪訝そうな顔でこつちを見て

いる。俺を、見ている。

逃げなきゃ！！

途端にそう思った俺は、屋上への階段をものすごい勢いで駆け上がっていた。ドアに手をかけて一気に開くと屋上へと体を滑り込ませ、ドアを閉める。大きな音がしたがそれは気にしていられない。急いでいつもの定位置の屋上ドアの屋根に上る。

「…っはあ、やっちゃった。何やってんだ、俺…」

後悔が吐き気になって押し寄せてくる。頭の中がぐるぐる回る。気持ち悪い。目が回る。仰向けに倒れこんでごろりと横向きになると、いくらか吐き気はましになる。冬の冷たい風が心地いい。しばらくここにしよう、そう思った時だった。屋上のドアが開いた。予想はしていたが、まさか追ってきたんだろうか？俺を？光司が？

しばらく黙っていると、足音が聞こえて俺の視界に見慣れた顔が現れた。

「何やってんだ。風邪、引くぞ？」

何事もなかったかのように、以前と同じように少し困ったような優しい笑みを向けてくる。何故か泣きそうになった俺は、ふいっと背を向けて反対側に寝転んだ。

「なあ、さっきの…あれ、どういう意味だ？」

少しの間のあと、光司が俺の脇に座って聞いてきた。俺は思わずびくっとしてしまった。光司がどんな顔でそれを聞いているのかわ

からない。恐かった。友達という立場を、失ってしまうのは恐かった。

「なんのこと？」

「おい、ふざけるなよ？俺がどんな思いでここにきたと思ってんだ。大地、こつち向けよ」

肩に手を掛けられてまたびくついた俺。怯えているようだった。寒さで震えているのか、恐怖で震えているのかわからない。歯が力チ力チと音を立てた。

「…なんで、んな顔してんだよ」

苦しそつに押し出すように吐き出された言葉に、光司の顔を見上げるとそこには、俺と同じように苦しげに顔を歪めた光司がいた。

「え…？おい、泣くなよ、大地？」

さつきまで我慢していたからだろうか？俺の目からは盛大に涙が溢れ出していた。ぼたぼたと音が聞こえそうなほど大粒のそれは屋上の床を濡らしていくつもの染みを作った。

「お、俺…、光司が好きだ」

掠れた声が、乾いた風に乗って消えた。

もうそれ以上何も言えない。これで終りなんだ。全部終りだ。

悲しかった。苦しかった。でも、楽にもなれた。隠していた想いはこんなにも募って、泣いてしまうほど募って、唇から溢れた。

これでいいんだ。これで光司が俺から離れていけば俺だって諦められる。男同士なんだ、どうにかなることなんかない。気持ち悪い

ただだ、こんな感情は、気持ち悪い。自分でもわかっている。だから自分が許せなかった。

光司は何も言わない。涙が止まらない。でも、それを拭うことももうない。思い切り泣いたって、今だけはいいいはずだ。起き上がって、泣きながら光司に笑ってみせる。

「悪い、気持ち悪いだろ？だから、もういいよ。友達、やめよう」
「バカ言っな！！」

光司が叫んだ。握った拳が震えている。叫んだせいなのか、肩で息をして顔が少し赤い。驚いた俺の涙は止まった。思わず呆然と光司を見つめてしまう。

「あ…、ごめん。つい…」

自分にびっくりしたのか、光司は拳を解いて落ち着こうと深呼吸を繰り返した。その間ただただ呆然と見つめる俺に光司は照れたような顔を向けてばつが悪そうに呟いた。

「そうだな、友達は、もうお終いだ。もう戻れるわけない」

やっぱり、と思った。乾いた笑みが零れる。これでいいんだ、うん。

「そりゃ、そうだよな。嫌われたって仕方ない」
「違う！！そうじゃない。…いい方に取れよ、大地」

言葉を遮られ目を見開いた俺を諭す様に光司が抱き締めた。何が起こったのかわからない。目の前が真っ白だ。

「ここ、光司？え？…何？」

「…っから、俺も…、俺も、お前が好きだって言ってたよ。だから、友達じゃいられない！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5356i/>

熱いバニラ

2011年1月13日17時50分発行